様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０８３０

研究課題名（和文）近世＝近代イランにおける「帝国」統治の変容とクルド系諸侯

研究課題名（英文）Political Integration of Kurdish Tribes in Early Modern and Modern Iran

研究代表者
山口　昭彦（Yamaguchi, Akihiko）

聖心女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：５０３０２８３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、前近代西アジアにおいて、国家権力が国内の多様な民族集団をどのように統合しようとしたのかを検証するために、サファヴィー朝(1501-1722)からカージャール朝(1796-1925)までの歴代イラン系王朝のもとで、西部辺境地帯にあったクルド系住民がどのように統合されていったのかを、クルド社会の支配層たるクルド系諸侯と中央政府との関わりに焦点を当てて明らかにすることをめざした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、前近代西アジアの諸国家においては多様な民族が緩やかに統合されていたとされてきたが、民族的な違いがどのような政治的・社会的な意味をもったのかについては関心が向けられることがなかった。その理由の一端は、前近代西アジアの国家にあっては普遍的宗教たるイスラムが統治理念として機能していたがゆえにムスリムである限り民族的範疇はさしたる意味をもたなかったと理解されてきたことにある。本研究では、前近代西アジア社会においても民族的な差異が意識されていたことや、政策的にもそうした差異を前提に統合が図られていたことについて実証的に明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：To trace the evolution of the integration process of ethnic minorities in premodern West Asian states, this study aimed to clarify how the Kurdish tribes living in the western frontier of Iran were incorporated into the state system from the Safavid period (1501-1722) to the Qajar period (1796-1925), focusing on the relationship between the Kurdish amirs and the central government.

研究分野：歴史学

キーワード：イラン　クルド人　サファヴィー朝　オスマン朝

１．研究開始当初の背景

従来、前近代西アジアの諸国家においては多様な民族や宗教集団が緩やかに統合されていたとされてきたが、その実態についての研究は進んでいない。宗教マイノリティに関する研究は不十分ながら存在するが、民族的な違いがどのような政治的・社会的な意味をもったのかに関しては、あまり関心が向けられることがなかった。その理由の一端は、前近代西アジアの国家にあっては普遍的宗教たるイスラムが統治理念として機能していたがゆえに、ムスリムである限り民族的範疇はさしたる意味をもたなかったと理解されてきたことにある。さらに、西アジアにおいて民族が覚醒するのはあくまでも近代以降であるとの通説が、ナショナリズムを近代の産物と捉える近年の学界動向と相まって、前近代の民族を問うことを妨げてきたのである。

しかし、そもそも前近代社会にあってもアラブ、トルコ、あるいはクルドなどといった呼称があった以上、民族的差異が一定の意味を有していたのは間違いなく、このような自己と他者を分かつ意識がどのような契機において発現したのか、それが人々の政治行動や社会生活にいかなる影響を与えたのか、さらに、国家権力がそうした意識をどのように動員・利用したのかなど、民族という集団性をめぐる基本的な諸問題が改めて問われる必要があろう。

本研究では、現在、トルコ、イラン、イラク、シリアなどにまたがって居住するクルド系住民のうち、16 世紀以降、イラン国家の領域に組み込まれていったものたちに焦点を当て、かれらがサファヴィー朝（1501-1722）からカージャール朝（1796-1925）にいたるまでの歴代イラン系王朝にどのように統合されていったのかを歴史的に明らかにすることをめざした。

２．研究の目的

前近代のクルド社会においては、一般にアミールと呼ばれる諸侯が率いる部族連合が各地に割拠していた。特定の支配家系がアミール位を継承しながら家臣団としての諸部族を束ね、一定の所領を支配していたのである。16 世紀以降、東にはサファヴィー朝が勃興し西からはオスマン朝（1300 頃-1922）が勢力を拡大するなかで、かれらの居住地域は両帝国の対峙するところとなり、結局、かれらの多くがオスマン朝、一部がサファヴィー 朝の支配を受け入れるようになった。

本研究では、サファヴィー朝期以降、イランに統合されたクルド系諸部族やかれらが居住する地域に焦点を当て、イランという領域的枠組みが形成される過程で、クルド系諸部族がどのように国家の支配秩序のなかに組み込まれていったのかを明らかにすることを目的とした。とくに、歴代イラン系王朝がどのような政策を通じてかれらの統合を図ったのか、また、それによってかれらのイランへの帰属意識がどのように生まれていったのか、また、国家による統合政策が、クルド系諸侯の統治する地域社会の権力構造にどのような影響を与えたのか（言いかえれば、国家権力はどのように地域社会に浸透したのか）、また辺境に位置した当該地域の権力構造にイラン=オスマン関係がどのような影響を与えたのかといった諸点を取り上げた。

３．研究の方法

研究の方法は、対象地域での実地調査、史料収集、分析からなる。

（1）実地調査として、クルド系住民が多数居住する西アゼルバイジャン州、コルデスタン州、ケルマーンシャー州などを訪問し、とくにサファヴィー朝期以降の歴史的建造物を実見し、都市の構造やその変容を確認した。

（2）史料としては、イラン各地の文書館（国立公文書機構・図書館、文化遺産局サナンダジュ支部など）やトルコの大統領府文書館などで、それぞれペルシア語やオスマン語の関連文書を収集した。さらに、叙述史料や文書史料を校訂した文献の収集にも努めた。

（3）分析の論点としては、主に以下のようなものを設定した。

①イランの国家形成とクルド系諸侯：サファヴィー朝崩壊後、イランは半世紀以上にわたる政治的混乱期に入り、オスマン朝などの侵入も招いた。こうした状況にもかかわらず、イランという領域的枠組みは維持されて、カージャール朝として「再統一」された。その背景には、周辺諸国、とりわけオスマン朝との関係が深く作用していたばかりでなく、狭間にあったクルド系諸侯の動向も重要な要因であったと思われる。この点を具体的に検証する。

②在地エリートの台頭と中央政府：サファヴィー朝後期、クルド系諸侯の都市定住化が進む過程で、かれらの拠点となった都市において宗教指導者や官僚層が台頭し、かれらが中央政府と結びついて諸侯の改廃を行うこともあった。これら都市の名士層がどのように台頭し、また中央と地方との関係においてどのような役割を演じたのかをより長いタイムスパンで検証する。

③クルド系諸侯の王朝権力中枢への参与：サファヴィー朝後期になると、クルド系諸侯のなか

にも国家権力の中枢に食い込むものが現れてくる。そのメカニズムを明らかにするとともに、そのことがイランの国家形成や多民族統合にとってどのような意味をもっていたのかを探る。

４．研究成果

主な研究成果は、以下の諸点である。

①イランにおける有力クルド系諸侯の一つであったアルダラーン一族を取り上げて、かれらとサファヴィー朝以降のイラン系歴代王朝との関係の変遷を 16 世紀から 19 世紀までたどりながら、17 世紀後半からは若干の例外を除けばほぼ一貫してイラン系王朝との関係を維持し、自らをイランの一部と見なすようになっていたことを示した。この作業によって、16 世紀以来のイランの国家形成と辺境の在地社会の変容の一端を明らかにすることができた。

②アルダラーン一族の牙城となったサナンダジュにあって、とくにカーディーやシャイフ・アルイスラームを輩出していたマヴァーリー家という有力ウラマー家系を取り上げ、カーディーやシャイフ・アルイスラームへの任命に関する、17 世紀から 19 世紀にかけての一連のペルシア語文書を検証し、かれらがアルダラーン一族と歩調を合わせつつ、歴代の王朝や権力者から任命を受けていたことを論証した。

③サファヴィー朝の支配を受け入れたクルド系諸部族のうち、とくに「イランのクルド」と呼ばれた諸部族に焦点を当て、かれらがクルド系諸部族のサファヴィー朝への統合に果たした役割を分析した。具体的に言えば、かれらが弱小であるが故に、有力諸侯とは異なり、特定の所領に固執することなく、サファヴィー朝もまたかれらのそうした性質を利用し、東北部に移住させ国境防衛に活用した。さらに、17 世紀からの国政改革の中で、こうした「イランのクルド」のなかから、イラン各地の知事職や国政の中枢に参与するものも現れたことを指摘した。

５．主な発表論文等

〔論文〕（計　3 件）
「イランのクルド」とサファヴィー朝の「強制」移住政策, アジア・アフリカ言語文化研究, 93, 2017, 65-90 ページ
「周縁から見るイランの輪郭形成と越境」山根聡・長縄宣博（編）『越境者たちのユーラシア』ミネルヴァ書房、2015 年、79-104 ページ
“The Safavid Legacy as Viewed from the Periphery: The Formation of Iran and the Political Integration of a Kurdish Emirate,” KONDO Nobuaki ed., *Mapping Safavid Iran*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2015, pp. 127-154.

〔学会発表〕（計　1 件）
“Evolution of Center-Periphery Relations as Seen from the Appointment Orders of Local Clerics: The Case of Ardalan Province in the 17th-19th Centuries,” *Eighth European Conference of Iranian Studies*, September 15-19, 2015, Hermitage Museum, Saint Petersburg (Russia)

〔図書〕（計　1 件）
編著書『クルド人を知るための 55 章』明石書店、2019 年 1 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。